

# 環境保全は一人ひと

だれもが環境保全の大切さを知っている。しかし、消費者はそれを日常生活のなかで実行しているか? メーカーには環境のことを配慮する余地がもっとあるのでは……。とかく安易さに陥りがちな風潮を懸命にくい止めようと、人や物、サー

ビス、組織・地域に至るまで、あらゆる環境保全実現をライフワークに大車輪している「牽引車」的的存在の2人を紹介する。2人が呼びかける共通の言葉は「環境保全は、地球規模で考え、地域できめ細かく行動を起こそう」。

## 環境との共生めざす

### 国際規格の企業づくり

種やかで、かつ慣れた物産。熊本県出身、神戸大学で理論経済学、計量経済学を専攻し、東京に本社を持つ銀行に入社した。バブル時期で、リゾート開発の資金融資申し込みが殺到、その審査部門勤務が長かった。

仕事とは別に、地域の異業種交流仲間と自然環境に配慮した「まちづくり」を研究した。環境を考

株式会社 米ヶ田健司 (37)  
システム研究所 代表取締役

### 米ヶ田健司 (37)

えた企業経営の仕組み、物づくりとは……。環境マネジメントへの関心が高まってきた。融資申し込み企業の開発予定地調査の際には動植物などへの影響(環境アセスメント)も調べて報告書に付けたが、融資の判断材料とはならなかった。「これでいいの?」と疑問は湧いていった。

バブルで地球サミット(一九九九年)が開催され、「環境」が

世論のキーワードに。「環境との共生時代を目指す環境コンサルタントはビジネスとして成り立つ」と確信を持った。世界で最も権威のある環境監査員認定機関である「EARRA」(英国)の環境監査員認定試験に挑戦、パスした。

バブルがはじけて銀行は債権回収におおわらわ。職場労組書記長として冷静に銀行の実態を見た。

平成八年一月に銀行を退社、福岡市へ。環境調和型の企業づくりの国際規格である「ISO14000シリーズ」を地域企業に浸透させるのが新しい仕事だ。

「ISO」の理解へ東奔西走

JR博多駅前のマンション1室を事務所にして、一年間は企業を回って「ISO」を理解してもら

うことに足を棒にした。やがて、行政などからの講演依頼も増え、今は福岡県企業振興公社委嘱のエネルギー環境診断指導員でもある。

「私が目指すライフワークは、製品の原材料から生産、流通、販売、使用、廃棄までの全ライフサイクルを通じて環境への影響(LCA)を最小にする手法探しまでお手伝いすること」。米ヶ田さんは言葉を結んだ。

日本からの進出希望企業に対して、経営システムが「ISO」の環境マネジメントシステムの規格・基準に合致しているかどうかをチェックし始めた、という。わが国でも「ISO認定」をイメージPPRに活用する企業も出てきた。

【環境セキュリティ・システム研究所では、事業所、工場、オフィスなどを対象に「初級環境調査トレーニング・コース」を開催中。所要日数は3日程。問い合わせは同研究所(☎092・483・1595)へ】



2006.04.06

オオオオオオオオオオオオ